静岡県立大学短期大学部
研究紀要 36 号（2022 年）-3

女子大学生の育児に対する感情と動機づけおよび育児経験との関連

The relation between emotions for childcare, motivation, and childcare experience among female college students

小林佐知子 [1)]　中島奈保子 [2)]　松本麻友子 [3)]
KOBAYASHI Sachiko,　NAKASHIMA Naoko,　MATSUMOTO Mayuko,
橘春菜 [4)]　内山有美 [5)]　松岡弥玲 [2)]
TACHIBANA Haruna,　UCHIYAMA Yumi,　MATSUOKA Mirei,
金田宗久 [2)]
KANEDA Munehisa,

【要旨】
本研究は女子大学生における育児への感情と育児動機づけおよび育児経験との関連について検討することを目的とした。女子大学生・短期大学生 144 名を対象に，これまでの育児経験と育児への感情（ポジティブ感情・ネガティブ感情），育児動機づけ（「見返り期待」・「内的喜び」・「社会的当為」）に関してインターネットを通じた質問紙調査を行った。育児への感情から育児動機づけへのパス，およびこれらの変数に対する育児経験からのパスを想定した研究モデルに沿ってパス解析を行った。その結果，育児へのポジティブ感情は内的喜び，ネガティブ感情は見返り期待と関連した。育児経験は見返り期待と直接的に関連するとともに，ネガティブ感情を介して間接的に関連した。学部系統の違いを調べたところ，保育系学部の学生は他学部の学生よりも内的喜びが高く，見返り期待が低いという特徴がみられた。最後に，青年期の段階から育児経験をすることの意義について考察した。

キーワード：育児への感情　育児動機づけ　育児経験　女子大学生

1）静岡県立大学短期大学部　2）愛知学院大学　3）神戸親和女子大学
4）名古屋大学　5）四国大学

１．はじめに

仕事と育児の両立の難しさや虐待など育児を巡る問題が社会問題となる中，これからの子育て世代は育児に対してどのように感じているのであろうか。女子大学生の１割程度は出産や育児を希望しないという報告があり[1)2)]，自分の生き方や行動が制限されるという制約感が大きな理由となっている。また，女子大学生にとって育児は“嬉しい”，“幸せな”感情と“大変な”，“イライラする”感情を併せ持つ両価的なものであること[3)]，青年期女子の育児不安が年齢と共に高まることが報告されている[4)]。育児経験者である親が育児に対して両価的感情をもつことは自明であるが[5)]，まだ出産・育児を経験していない大学生においても両価的感情を抱くのはなぜであろうか。先行研究は少ないが，過去の子どもとの接触体験が多い人は，子どもや育児へのポジティブなイメージや感情をもちやすいことが示唆されている[6)7)]。少子化が続く中，幼い子どもを世話したり一緒に遊ぶような育児経験の少なさが，育児へのポジティブ感情やネガティブ感情に影響する可能性が考えられる。

さて，感情は意欲すなわち動機づけと関連する。動機づけは「認知」「欲求」「感情」など複数の心理的要因から形成される統合的な概念であり，行動を生起させ，持続させる働きをする。これまでの動機づけ研究では認知の働きが着目されてきたが，最近は感情の働きも注目されている[8)]。動機づけに関する研究は学習や仕事に関して多く積まれているが，近年は日常的・習慣的な行動も研究されるようになり，育児の動機づけ（以下，“育児動機づけ”とする）の研究が進められている[9) 10)]。乳幼児をもつ母親を対象とした場合[9)]，育児動機づけは「内的喜び」「見返り期待」「社会的当為」から構成され，ポジティブ感情に生起する「内的喜び」は内発的動機づけに，何らかの報酬のために行う「見返り期待」や義務感による「社会的当為」は外発的動機づけに属すると考えられる。育児動機づけと実際の育児行動との関連を調べた実証的研究はまだ少ないが，“楽しいから（育児を）やる”という「内的喜び」は実際の育児行動にもつながる重要なものであることが示唆されている[11)]。育児を望まない女子大学生が少なからず存在することを踏まえると，楽しさや喜びのために育児に向かう心性を早期から高めていくことには意義があると考えられる。青年期女子を対象に，子どもとの接触経験が乳児への接触欲求を中心とした育児動機づけと関連したこと[6)]から，育児経験は育児動機づけを促進すると考えられるが検討数はまだ非常に少ない。

以上から，本研究では女子大学生を対象に，育児への感情と育児動機づけおよび育児経験との関連について検討する（図 1)。また，保育系の学生は子どもとの接触経験が必然的に多くなるため，保育系と他の学部系統との差を明らかにする。なお，育児経験がほとんどない人が世話行為（“トイレ”や“歯磨き”など）をどの程度具体的に想起できるのか

は未知数であり，実際とは異なった育児内容を想起する可能性も考えられる。そのため，本研究では育児場面を描いたイラストを用い，統一した刺激から喚起される育児への感情を測定する。

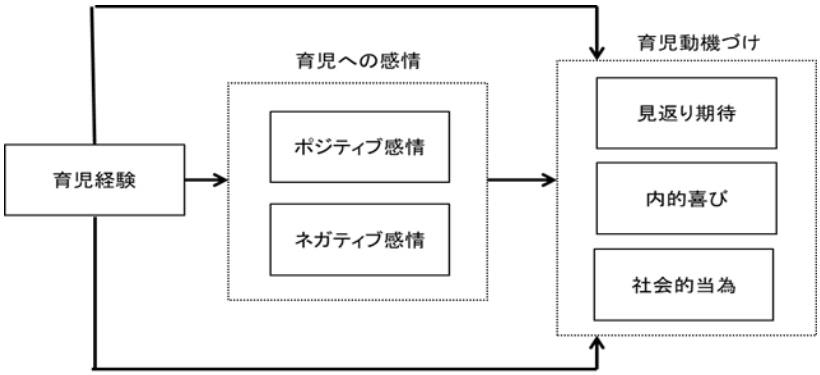

図1. 本研究のモデル

２．方　法

（１）対象者

A・B・C 県の 4 大学と 2 短期大学に所属する女子大学生・短期大学生 149 名を対象とした。回答に不備等があった 5 名を除き，144 名（四年制大学 118 名，短期大学 23，不明 3 名）を分析対象とした。

（２）手続き

各大学にてリクルート用のポスター等を通じて調査協力を呼び掛けた後，協力希望者には説明文書を用いて説明を行った。同意が得られた場合に調査用 URL にアクセスしてもらった。web 調査への回答をもって同意を得たものと判断した。調査は 2020 年 10 月に実施した。

（３）調査内容

育児経験：８つの育児行動（おむつ替え，トイレに連れていく，一緒にお風呂に入る，食事の世話，寝かしつけ，絵本や本の読み聞かせ，一緒に遊ぶ，抱っこやおんぶ）をこれまでにどの程度経験しているか，“まったく経験がない”～“かなり経験している”の 4 件法で尋ね，合計得点を算出した。

育児への感情：花沢[6)]の「対児感情尺度」を参考に，ポジティブ感情（“ほほえましい”，“あたたかい”，“たのしい”）3 項目と，ネガティブ感情（“めんどうくさい”，“わずらわしい”，“うっとうしい”）3 項目の計 6 項目を作成した。中島他[12)]の育児場面を描いた 7 枚のイラ

ストを呈示し（図 2），“次にあげる印象をどのくらい感じましたか”と尋ね，”全く感じない”から”強く感じる”までの 4 件法で回答してもらった。ポジティブ感情,ネガティブ感情それぞれの合計得点を算出した。α係数は，ポジティブ感情・ネガティブ感情ともに.95 であった。

育児場面のイラストは，育児場面毎（離乳食，トイレトレーニング，着替え，歯磨き，おむつ替え，絵本の読み聞かせ，入浴）に大人が育児に携わっている様子を表現したものであり，育児場面として適切かどうか育児経験者によって確認されている [12) 13)]。対象者自身が育児をしている場面を想起できるように子どもや養育者の表情等がわからないように作成されている。育児経験者を対象に妥当性を確認したところ，いずれのイラストもポジティブ感情やネガティブ感情に極端な数値を示すものはなく，偏りが少ないことが確認されている [12)]。

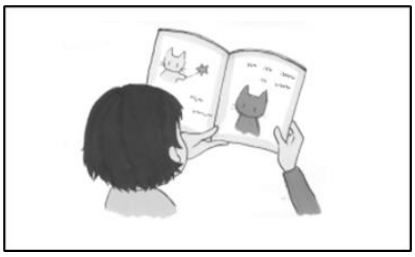

図 2. イラスト例（絵本の読み聞かせ場面）

育児動機づけ：中島他 [9)]の「子育て動機づけ尺度」22 項目を用いた。老後の世話や人間関係の維持など何らかの報酬のために行う「見返り期待」(e.g.“夫婦の絆を深めたいから”，“自分の老後の面倒をみてもらいたいから”）9 項目，育児が楽しいから行う「内的喜び」(e.g.“子どもに接していることが楽しいから”，“子育てすること自体が好きだから”）8 項目,「社会的当為」(e.g.“生んだ（生ませた）責任があるから”，“自分が親に育ててもらったから”）5 項目の 3 下位尺度から構成される。「将来あなたが育児をするとき，どのような理由で育児をすると思いますか。」という教示に対し，“あてはまる”～“あてはまらない”の 5 件法で尋ねた。各下位尺度の α 係数は，それぞれ.86，.78，.72 であった。下位尺度の合計得点を項目数で割った平均値を算出した。

なお，対象者の中には将来的に子どもを育てたくないと考えている人がいることを想定し，4 件法で育児の希望を尋ね,「子どもを育てたくない」と回答した場合は,「育児動機づけ」尺度には回答せず，次の質問に移るようにした。

属性：年齢，学年，所属学部系統，大学名を尋ねた。

（４）分析方法

各変数の平均得点を算出後，相関は Pearson の相関係数を，2 群間の差の検定には t 検定を行った。分析には統計ソフト IBM SPSS Statistics version 23 を使用し，有意水準は 5%未満とした。

（５）倫理的配慮

リクルート時および調査実施前の説明文書で，調査の趣旨と，データは全体として処理されるため個人が特定されないこと，調査は匿名で行われるためにプライバシーは十分に保護されること，研究以外の目的には使用されないこと，調査への参加は任意であること，web 調査であるため撤回ができないこと，調査中に万が一気分が悪くなった場合は中断して構わないこと等を文書にて明記した。未成年の学生にはリクルート時に保護者への説明文書を学生を通じて配布した。これらに同意が得られた人のみ調査に参加してもらった。なお，本研究は静岡県立大学研究倫理審査委員会の承認（受付番号 2 - 10）を得て実施した。

３．結　果

（１）対象者の特徴

対象者の平均年齢は 19.96 歳（標準偏差 = 0.92），学年は 1 年生 21 名，2 年生 47 名，3 年生 66 名，4 年生 6 名，不明 4 名であった。学部は人文 42 名，保育 48 名，外国語 11 名，福祉 5 名，農学 1 名，健康 16 名，芸術 11 名，総合 5 名，その他 2 名，不明 3 名であった。

（２）各変数の基礎統計量および相関係数

各変数の平均値と標準偏差，相関係数を表 1 に示す。育児経験と育児のネガティブ感情および見返り期待との間に負の相関が示された。ポジティブ感情と内的喜びには正の相関がみられ，ネガティブ感情は見返り期待とは正の相関，内的喜びとは負の相関を示した。

表1 各変数の基礎統計量および相関係数

		M(*SD*)	ポジティブ感情	ネガティブ感情	見返り期待	内的喜び	社会的当為
育児経験		20.82 (6.46)	.10	-.18*	-.32***	.12	-.10
育児感情	ポジティブ感情	60.79 (12.12)	—	-.39***	-.09	.34***	-.02
	ネガティブ感情	28.61 (8.75)		—	.33***	-.21*	-.03
育児動機づけ	見返り期待	2.22 (0.77)			—	.14	.28**
	内的喜び	4.15 (0.56)				—	.24**
	社会的当為	3.66 (0.82)					—

***$p < .001$ **$p < .01$ *$p < .05$

（３）育児経験，育児への感情および育児動機づけの関連

本研究のモデル（図１）に沿って，パス解析を行った。はじめに育児への感情を従属変数，育児経験を独立変数とする回帰分析を行ったところ，育児経験からポジティブ感情へのパスはみられず，ネガティブ感情への有意なパスがみられた（$\beta = -.18$，$p < .05$）。次に，育児動機づけを従属変数，育児経験および育児への感情を独立変数とする重回帰分析を行ったところ，見返り期待の説明率が有意であり（$R^2 = .17$，$p < .001$），育児経験（$\beta = -.27$，$p < ,01$），ネガティブ感情（$\beta = .29$，$p < .01$）からのパスが有意であった。内的喜びについても説明率が有意であり（$R^2 = .13$，$p < .001$），ポジティブ感情（$\beta = .30$，$p < .01$）からのパスが有意であった。社会的当為については説明率やパスの有意性がみられなかった。社会的当為を除いたモデル図を示す（図 3）。

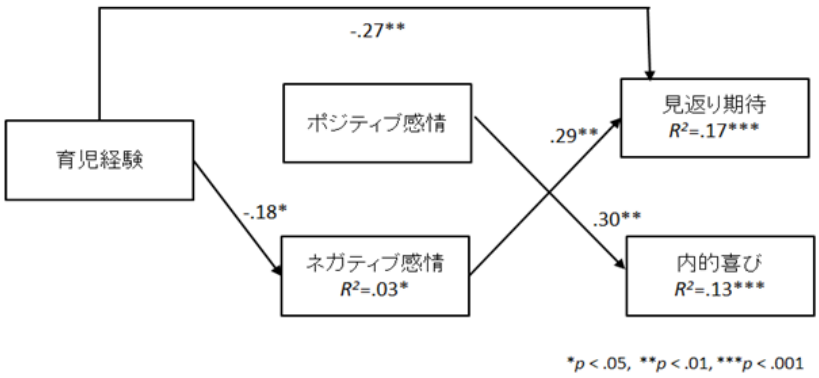

図3. パス解析の結果

（４）所属学部による比較

保育系の学生と他学部の学生との比較を行った。その結果，保育系の学生は他学部の学生よりも育児経験が多く（$t(141) = 4.71$，$p < .001$），育児動機づけの見返り期待が低い一方で（$t(139) = 2.33$，$p < .05$），内的喜びが高かった（$t(139) = 3.57$，$p < .01$）。育児への感情や，育児動機づけの社会的当為には差が示されなかった。

４．考　察

本研究の目的は，女子大学生の育児への感情と育児動機づけおよび育

児経験との関連性を検討することであった。各変数の関連について，研究モデルに沿ってパス解析を行ったところ，育児経験は育児へのポジティブ感情とは関連しないが，ネガティブ感情と負の関連をした。育児経験が多いほど子どもへの接近感情や好意感情が高いこと[6)14)]が示唆されているが，育児に対する感情とも関連することが明らかにされた。ただし，育児経験はポジティブ感情ではなく，ネガティブ感情と関連したことから，実際に子どもの世話や子どもとの遊びを経験することは，育児の煩わしさや面倒さを和らげる働きをすると考えられる。

育児経験は育児動機づけの見返り期待と負の関連をする一方，内的喜びや社会的当為とは関連しなかった。育児経験の多さは，報酬のために育児をするという外発的動機づけを低減することが示唆される。子どもの世話や相互作用の経験を通じて育児を具体的に理解したことが影響した可能性がある。

育児への感情は育児動機づけと関連し，ポジティブ感情は内的喜びと，ネガティブ感情は見返り期待とそれぞれ正の関連をした。育児への感情は育児動機づけのプロセスを活性化すると考えられ[15)]，本研究の結果からは内発的動機づけ，外発的動機づけのいずれのプロセスにも関与することが示唆される。1・2歳児をもつ母親を対象にインタビュー調査をしたHajal et al.[16)]では，焦りや怒りのようなネガティブ感情が動機づけと関連をしているが，本研究ではどちらの感情も動機づけと関連することが示された。育児動機づけの３つの下位要因については，ポジティブ感情は内的喜びと関連した。育児へのポジティブ感情と，“楽しいから”“子どもが好きだから”育児をするという内的喜びが正の関連を示すのは自然なことと考えられる。内的喜びは育児期の母親にとって遊びや散歩に行くなど子どもと関わる行動の原動力である[11)]。青年期の段階から育児に対するポジティブ感情を高めていくことは大切なことと考えられる。一方，ネガティブ感情は見返り期待と正の関連を示した。本研究で設定した報酬は，夫婦関係や自身の老後の世話や経済力，孤独回避や周囲からの承認欲求等である。育児に対して煩わしさを感じる人ほど，このような報酬のために育児に向かう心性があるといえる。見方を変えれば，ネガティブ感情が高い人が育児に向かうためには報酬が必要とも考えられる。しかし，育児の報酬は学業や仕事の成果と比べて曖昧なものであり，達成したかどうかがわかり難く，育児を生起するための強いエネルギーになるとは言い難い。また，報酬のために育児をすることは，“育児は見返りを求めるものではない”という社会的風潮に反した面もあると考えられる。なお，本研究の結果から，育児経験→ネガティブ感情→見返り期待のパスが示されたことから，育児経験はネガティブ感情を介して間接的に育児動機づけに影響することが示唆される。より多くの育児経験をもつことがネガティブ感情を抑え，結果的に外発的動機づけの抑制につながる可能性があると考えられる。

外発的動機づけのうち，責任感や義務感による社会的当為は育児経験や育児への感情と関連しなかった。社会的当為は“親が我が子を育てるのは当たり前のこと”として育児に向かう心性である。女子大学生を対象とした場合，こうした心性は育児経験や感情には左右されないものと考えられる。

学部系統による差をみると，保育系の学生は他学部の学生と比べて育児への感情に差がなかった。石松他[17]では，保育系の学生は，看護系・栄養系の学生に比べて子ども好きが多く，ポジティブな対児感情や育児イメージをもっていたが，本研究ではその特徴がみられなかった。他方，育児動機づけに特徴がみられ，保育系の学生は見返り期待が低く，内的喜びが高かった。もともとの子ども好きの特性があるためか，保育系の学生は報酬による外発的動機づけは低く，育児に対する内発的動機づけは高いといえる。

以上，本研究から，大学生の育児経験は育児への感情や動機づけと関連することが明らかになった。少子化や核家族化が続く中，きょうだいや近い親戚に乳幼児がいない場合は，育児経験の機会はかなり限られるであろう。本研究では育児経験の時期をくわしく測定していないが，青年期においてより多く育児を経験する機会をもつことは，将来の育児に有効に働く可能性がある。

５．今後の課題

本研究は女子大学生を対象に検討したが，青年期の育児への感情や動機づけについてより深く理解するために，育児期の母親との比較をすることは意義深いと考えられる。また，男子大学生の対象者を増やし，男女差をみることも必要である。男性は外遊び，女性は世話行動といった育児分担を男女ともに想定していること[18]，女子学生は男子学生より養護性が高いこと[19]等の先行知見を踏まえると，育児動機づけにも差があることが推測される。さらに，育児動機づけのように日常的行動の動機づけは無意識に働くことが多い[8) 20]ため，無意識的に働く育児への感情や動機づけのメカニズムを探っていくことも意義深いと考えられる。

文　献

1) 坂本康子，古橋啓介．女子大学生における理想の生き方と育児観について，福岡県立大学人間社会学部紀要 2006 ；15，119-137.
2) 森本恵，中島有加里，山地建二．大学生女子の結婚，出産，育児および就業に関する意識調査，高知医科大学紀要 2000 ；16，65-76.
3) 礪波朋子．女子大学生の乳幼児との接触経験と育児イメージ及び養護性との関連，京都光華女子大学研究紀要 2011 ；49，13-25.

4) 鈴木幹子, 清水洋子, 伊藤裕子. 女子青年における育児性の発達, 児童学研究：聖徳大学児童学研究紀要 2005 ; 7, 89-94.
5) 大澤直樹. 発達心理学における育児感情研究への家族社会学的視点の導入：歩行開始期の親の育児感情と母親・父親の動機づけの差異の解明に向けて, 京都大学大学院教育学研究科紀要 2020 ; 66, 83-96.
6) 花沢成一. 母性心理学. 第 1 版. 東京 : 医学書院, 1992.
7) 礪波朋子. 青年期の子どもイメージ・育児イメージ及び養護性に関する研究, 京都光華女子大学研究紀要 2011 ; 50, 41-52.
8) 速水敏彦. 感情的動機づけ理論の展開―やる気の素顔―. 京都：ナカニシヤ出版, 2012.
9) 中島奈保子, 松本麻友子, 橘春菜, 他. 子育て動機づけ尺度の構成, 日本発達心理学会第 26 回大会論文集 2015 ; P3-84.
10) 寺薗さおり. 子育て期の母親の育児行動に対する基本的心理欲求充足と動機づけとの関連, 小児保健研究 2019 ; 78, 33-40.
11) 小林佐知子, 中島奈保子, 松本麻友子, 他. 乳幼児をもつ母親の育児に対する動機づけと育児行動, 静岡県立短期大学部研究紀要 2018 ; 32-W, 1-7.
12) 中島 奈保子, 小林 佐知子, 松本 麻友子, 他. IAT による育児への非意識的態度の測定に向けて(2)―育児関連イラストに対する評価の分析―, 日本心理学会第 84 回大会 2020a ; PO-018.
13) 中島 奈保子, 松本 麻友子, 小林 佐知子, 他. IAT による育児への非意識的態度の測定に向けて：刺激選定を目的とした「育児」関連ツイートの分析, 日本発達心理学会第 31 回大会論文集 2020b ; 232.
14) 佐々木綾子. 親性準備性尺度の信頼性・妥当性の検討, 福井大学医学部研究雑誌 2007 ; 8, 41-50.
15) Dix,T. The affective organization of parenting : Adaptive and maladaptive processes, Psychological Bulletin, 1991 ; 110, 3-25.
16) Hajal NJ, Teti DM, Cole PM et al. Maternal emotion, motivation, and regulation during real-world parenting challenges, Journal of Family psychology 2019 ; 33, 109-120.
17) 石松直子, 江藤節代, 山本捷子. 大学生の持つ育児イメージと胎児感情：看護学科学生と他学科学生との比較, 日本赤十字九州国際看護大学 intramural research report 2004 ; 2, 145-154.
18) 佐藤裕紀. 大学生の子育て関与意識と家庭科教育の課題, 茨城大学教育実践研究 2017 ; 36, 147-157.
19) 棚澤令子, 福本俊, 岩立志津夫. 大学生における過去の被養護・養護体験が現在の養護性（nurturance）へ及ぼす影響, 教育心理学研究 2009 ; 57, 168-179.

20）及川昌典．知られざる力．鹿毛雅治（編）．モチベーションを学ぶ12の理論：ゼロからわかる「やる気の心理学」入門！．東京．：金剛出版，2012 ： 135-159.

付　記

本研究は令和元年度科学研究費助成事業（基盤研究（C）19K03249）の助成を受けて実施した。
本研究の一部は，日本発達心理学会第32回大会で発表した。

（2022年 12月　5日 受理）